
俺が、俺たちが海軍長官だ！

rahotu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺が、俺たちが海軍長官だ！

【Nコード】

N4834Y

【作者名】

rahotu

【あらすじ】

皇暦2598年 中帝国領土満州宙域に侵攻した日本帝国艦隊は裏切りにより一方的な敗北を喫した。

そして新たに任命される海軍長官、高野。

原作とは又違った大帝国の物語が今始まる。

ザ・オープニング（前書き）

前作の終わり方、書き方が作者のほうでも納得がいかなかったのも、また新しく書き直してあげました。

基本日本軍サイド中心で進んでいきますが、

ザ・オープニング

統一宇宙暦938年

北京星域満州近海

折から続く中帝国と日本帝国との長年にわたる戦争は、大小十六回の中断と講和を挟みつつ遂に日本海が長引く戦争を終わらせようと遂に賭けにでた。

最新鋭の戦艦八隻、巡洋艦十六隻、駆逐艦三十八隻に加え、旧来からの艦艇を加え延べ九十隻以上もの艦隊が一路中帝国首都北京を目指し進んでいく。

対する中帝国は針路上の航路に旧式艦体を僅かに六十。

精強で知られる日本軍にとって、駆逐艦一個戦隊でも十分に殲滅できる相手である。

日本海軍第二艦隊旗艦伊勢艦橋では、レーダー上に映る中帝国の艦隊を監視しつつ航空母艦から艦載機の発艦を急がせていた。

「急げ！！もう敵が直そこまで来ているぞ。爆装した機体から甲板にあげるんだ」

「十四番ケーブルを収容急げ。パイロットは緊急救命装置が安全に稼動するかどうか・・・」

「整備班、なにやってんの！！レーザー機銃のスコープがコンマ2

ずれてるぞ」

さながら戦場のような喧騒のなか、その男はいた。

日に焼けた浅黒い肌。

堀の深い目鼻立ちに、すっとした眉毛が男の顔の造詣に艶を与え。

分厚い唇に閉じられた瞳にすやすやと居眠りをこく優しい息遣いが、この男の外見的特長からいって想像できないほど穏やかである。

男の名は高野五十六

日本海軍では珍しい年功序列ではなく実力で提督まで成りおおせた一代の雄である。

この男、出撃前の忙しい格納庫の中でのうのうとベンチに横たわり、居眠りをしている姿を見るに。

到底、そのような男には見えないが、しかしこの男の凄い所はこれが彼なりの精神統一の一種だと言うことだ。

勝敗は兵家の常であり、驕れる者久しからず、夏草や兵共が夢のあと。

戦場とは無常でありたとえ一時の勝利を得たとしてもやがて夏草のある苔がむした髑髏のようなもので、この男の価値観から言って戦闘を前に気張る將軍などではなく。

常に無為自然とし、戦場であっても自らを律するのではなく委ねる。

書くとは難しそうだが、用は『戦いを前にして士気を鼓舞するようではいけない。嘗て関の声一回にして兵気力士気とも充満し二階にして気力衰え三回目にして士気も萎える。將軍たるものは兵を鼓舞するのではなく如何に超然とした態度で戦場を俯瞰し、ここぞと言う時のみ えいっ！！』と声をあげ自ら先頭に立って戦う胆力を持たねばならぬ』

それとハンガーのベンチで寝ているのどう関係があるか分からないが、だがこの行動はこの男なりの考えあつてのこと。

徒に余人が考えても仕方がないというかなんというか・・・。

整備用のオイルと火照って散る汗の臭いとが混ざり合った格納庫を高野は好きだった。

森の中で横たわり、そこで嗅ぐ草木の臭いと同じように高野にとって出撃前の格納庫の臭いは自然と心を和ませる一種の清涼剤であり。戦いを前にして猛己の心を落ち着かせる為であった。

高野がベンチに横になっていると、向こうから若い海軍士官が走ってくる。

高野の前で立ち止まり、見事の敬礼をしたその士官は。

「高野提督、そろそろ戦域に入りますので艦橋の方にあがってください」

その声で起きた高野は、目を開けジロリと思わず若い士官を睨んで

しまう。

提督に睨まれ何か粗相をしてしまったのかと思いきつく若い士官の姿に、高野は心の中で「また」思ってしまった。

寝起きの高野はそれほど機嫌が悪くはないのだが、つい目付きが悪くなってしまう。

こればかりはどうしようもないのだが、オロオロする士官は何も悪くは無いので高野としてはどうしたものかと考えこんでしまった。

「あの・・・提督、何処かお加減が悪いので？」

勇気を振り絞って何とか声をかける仕官に、私ははたと戦闘前だと言ふ事を思い出す。

「いや、なんでもない。直に艦橋に上がると伝えてくれ」

「はっ了解いたしました」

むっくり、とベンチから起き上がった高野は凝り固まった体の間接を解しつつ艦橋へと上がる為エレベーターの方に歩いていった。

最悪だ、今高野の目の前に広がる光景は目を覆いたくなるような惨状を映している。

栄えある大日本帝国帝国海軍の提督があらうこと中帝国と繋がり海戦中に裏切るなど、誰が予想できよう？

しかも同時に二名の提督が裏切ったのだ。

高野は普段の超然とした心を忘れ、怒りをあらわにして命じる。

「目標桶口艦隊および末山艦隊主砲発射用意」

「高野提督！？それは．．」

「今更味方殺しも糞もあるまい。裏切り者の乗艦に攻撃を集中。赤城と蒼竜、雲竜から雷撃隊を出撃、中帝国艦隊を足止めしろ」

高野提督の怒号に、思わず命令に従ってしまった参謀以下艦橋士官らは戸惑う味方を尻目に裏切り者を肅正する為に攻撃を開始した。

高野艦隊戦艦二隻重巡洋艦六隻からの砲撃が桶口および末山艦隊の側面を舐める。

「ど、同士桶口。高野艦隊が攻撃を仕掛けてくるぞ」

高野艦隊からの正確な砲撃が旗艦すれすれを掠めるなか脂汗を流し

た末山提督は同じく裏切り者である桶口提督に通信をつなぐ。

「あ、慌てるな同士末山。このまま中帝国艦隊の方に逃げればよいではないか。なに、既に前倉長官の旗艦は満身創痍だ。後の処理は中帝国に任せればよい」

「おおそうだな同士桶口。では早速逃げると・・・あぎゃあああああー!!」

だが、末山提督は最後の言葉を発することなく、悲鳴をあげながら通信が途切れる。

運悪く？高野艦隊の執拗な砲撃がついに末山の乗艦を捉え、戦艦金剛の主砲の直撃をエンジン部に受けた為一瞬で閃光と共に宇宙の塵へと化してしまった。

「どうした、同士末山、末山。ま、まさかやられたのか！？こうしてはおれん。機関全速中帝国艦隊と合流する」

桶口提督は末山提督の最後を悟り臆病風に吹かれたように全速で戦場から離脱していった。

だが、やっこの思い出中帝国艦隊と合流した時彼らは出迎えに来たはずの中帝国の艦隊の姿に絶句する。

高野提督が放った長槍は見事中帝国艦隊を粉碎し、碌な対空火器など揃っていなかった中帝国艦隊は一方的に雷撃の被害を蒙り、旗艦までも艦橋に被弾し提督以下艦隊首脳部が全滅。

残存艦隊を臨時に指揮を取っていた砲雷長に危うく撃たれそうにも

なり桶口以下裏切り者達は生きた心地がしなかった。

命からがら高野の猛攻から逃げ延びた桶口達はしかし中帝国でも気を許すわけにはいかなかった。

まあ、さっきまで自分達を攻撃していた奴等と一緒になのだから致し方あるまいが、それでも当初の予定よりも大幅に変更を余儀なくされた桶口提督はこんな時に末山が居たらと一人寂しく泣くのであった。

無論同情や憐憫の気持ちからではない。

唯単に責任や非難をおっ被せて被害を少なくしようとしただけなのだから。

日本帝国御所

満州会戦での敗北により帝国海軍前倉長官は重傷を負い最新鋭の戦艦を含む実に三割の兵力をたった一度の会戦で永久に失ってしまったのだ。

高野は裏切り者を粛清した後、自軍の不利を悟り残存艦隊をまとめ日本へと撤退。

そして現在高野は日本にやっとの思いで帰還したが、直に艦隊本部に呼び出され帝に拝謁する為に御所まで来ていた。

「高野提督、此度はそちの活躍で大勢の兵士たちが無事に生きて帰ってくれました。兵士達に替わりまず感謝の言葉を受け取ってください。本当にありがとうございました」

帝

日本建国の折から日本の守り神である柴神に選ばれた超常の能力を持つ女性達のことを指して日本では帝と言ひ国の最高指導者として崇め奉っている。

今代の帝は二年前に帝に選ばれたばかりだが、容姿は女性にしては長身で恐らく169cm位だろうか。

スツとした目鼻立ちに、強い意志を秘めた黒い瞳。

ビロードの様に艶のある美しく長い髪を頭の後ろで結い余った部分を紅いリボンでまとめて背中に垂らしていた。

（公式の帝ちゃんの没絵参照）

緋色の日本服を下に着て、その上に重なる帝のみが着る事を許された衣、紫の衣に袖を通し一国の指導者に相応しい風格と威厳とを併せ持つ傍ら、まだ二十歳にもならない少女の面影を何処となく残していた。

「いえ、非常時とはいえ勝手に指揮を取ってしまったこと弁解も御座いせん。すべては私の独断^{わたくし}に御座います、処罰は全て私目にどうか部下たちには寛大なご処置を」

高野は両膝を床につけ深く帝に向かって頭^{こうべ}を垂れた。

軍とは完全な縦割り社会であり信賞必罰は絶対である。

高野は自分よりも上位の者が板のにも拘らず、勝手に戦列を離れ独断で戦闘を行いあろうことか味方殺し（裏切り者の肅清とも言う）をやったのだ。

普通ならば軍事裁判にかけられよくて終身刑、最悪極刑も免れえぬ重罪であった。

クスリ

ふと花のような少女の笑う声が聞こえた。

躊躇いながら少しだけ目を上に向けると帝がまるで珍しいものを見るように口元を手で覆い隠していたが何分目が笑っていて今にも笑いこけそうであった。

「帝様、御前ですぞ」

爺や役の外務宇垣桜長官が憤然とした態度で帝を諫めるが、それが更に壺に嵌ったのかとうとう帝は噴出してしまう。

何かなにやら分からないことだらけだが、どうやら帝は私を罰する気はないようだ。

一頻り笑った後、帝は先程のキリッとした居住まいを崩し年相応の少女が浮かべるようなどんなことをいったら相手を困らせる事が出来るのだろうか。

と考えてる顔になって言った。

「高野提督、軍規によれば確かに貴方を処罰しなければなりません。ですが貴方のお陰で實際助かった者達が大勢いるのです」

帝は彼女の世話役の女官長ハルに重箱を渡し、それを高野の前に持ってきて置いた後ハルは恭しく礼をしてから静かに又帝のそばに戻った。

不思議に思い帝の顔を見るが、その顔は悪戯が成功するのが待ち遠しい子供の顔をしていた。

促されるままに重箱の蓋を開けると何と突然白い煙が出てきて箱の中身を見ようとしていた私の顔を直撃した。

あら不思議、なんと高野がヤング高野になってしまいました。

といった展開は無いのであしからず。

普通に手紙の束が入っていただけだ、それも尋常じゃないほどの。

「それ全部貴方の恩赦や特赦を求める手紙です、他にも生き残った兵士達の家族が署名活動をして私に送ってきてくれました。それに私自身貴方のことをできるならば助けたいと思っていましたから」

「帝様・・・」

「そんな顔をしないで下さい。高野、日本帝国臣民は皆例外なく我子のようなもの。子が死んで喜ぶ親など居るはずがありません」

帝はそう言って高野を諭すが、しかし子が死んで喜ぶ親のところで帝の顔が曇るのを高野は確かに見た。

「よって貴方の処罰を無しとし、替わりと言ってはなんですが今回の功を帳消しにしてと付きますが良かったですね高野。貴方には貴方を慕う大勢の人々が居ることを知る事が出来て」

高野は自分の心が温かい気持ちでいっぱいになるのを感じた。

そして、改めて帝の対する忠誠と日本という国に対する愛国心を高めていった。

維新会

高野五十六

この男には人に知られたくないある秘密がある。

御所で帝と拝謁し、その帰りに彼は市街にある居酒屋へと寄っていた。

本来高野のような高給取りである軍人が来る様な所ではない小汚い、しかし仕事を終えたサラリーマンやOL等が仕事の鬱憤を晴らしこの場所では如何なる無礼講も許される、そんな賑やかな場所だ。

店の店主と昔からの顔馴染みで、士官学校を抜け出してはよくここで仲間と共に酒盛りをしたり、上官の悪口を言ったりなど高野にとってもこの場所は大切な思い出の場所でもある。

お銚子を二本に簡単な摘みを二、三品。

それとご飯にナスと梅の漬物が添えられただけの簡単な料理に舌鼓を打ちつつ高野は一人個室で酒を飲んでいた。

同じ頃、市外市内の屋台や居酒屋果ては土木工事の現場で同時に休憩に入った者達が頭の米神に少し手を当てた時、それは始まった。

『では、これより維新会会議を始めたいと思います』

頭の中で響く声、何重ものプロテクトとジャミングを通しての超高速光子リアル電脳通信の世界から各々の休息や或いは仕事に手をつ

けていた者達に同時に声が届く。

彼らは自分達を維新会と呼ぶ丁度エイリス帝国がワープ航法を発見したと時を同じくして日本に生まれたある種の政治結社であった。

その力はこの千年近くの間世界中にくまなく根を張る特殊諜報機関東機関や副組織紺碧会、蒼海会などの諜報組織。

光井、南波重工など日本の政治産業芸能マスコミ界全てに裏から歴然たる影響力を誇る影の組織だ。

彼等の思想は唯一つ。

この世界の真実と日本の繁栄のみであり、その為にはあらゆる努力や工作犠牲を払ってきた影の功労者でもある。

事実彼等のお陰で高野が提唱する航空艦隊第一主義は日本海軍艦隊本部に認められ大型空母二隻を含む空母六隻が現在建造中であり、その他にも第一次及び世界恐慌において壮大な国家を凌ぐ資金力を持って壮大なマネーゲームを仕掛け。

エイリス、ドクツ、ガメリカ、ソビエト、オフランス、ポツポーランドから莫大な富を収奪する等その力は最早日本という国を越え世界規模での国際組織力を持ち尚且つスーパースパイ赤石大佐にも実体を掴ませない等その力はメンバーである高野ですら時々恐ろしく為るほどだ。

『まずは先の満州海戦での日本海軍の敗北についてですが、想定より遥かに被害が少なくすみしました』

『それについては高野君の手腕が大きく影響しているだろう。彼を引き込んでおいて良かったよ』

『しかしまさか二人同時に裏切るとは、これは想定外でしたよ。実際何かしら仕掛けてくるとは分かっていたましたが、まさか戦闘直後に裏切るなど』

『それは致し方ありません。東機関や紺碧会、蒼海会はガメラ、エイリス、ドクツ、ソビエトに散っていますから国内諜報力の低下は否めません。寧ろこのような事こそ明石大佐の分野では？』

『伊賀甲賀風魔の三流派を修めたスーパー忍者でも主君の命令が無ければ動かないとは。いやはやもう少し融通というものを聞かせてもいいものを。今回の失態を盾に諜報部に食い込むことは出来ませんか？』

『今でさえ綱渡りなのだから、これ以上の浸透は我々の姿が明るみに出てしまう。そうなれば帝や各国首脳部それと若草会の連中が黙ってはいないだろう』

『だがいい事もある。当初の予定であった裏切り者の存在を盾に現海軍首脳部を解任に追いやり我等の同士を海軍長官に置く言う案。存外上手く行きそうだぞ。女官に潜ませた草から早速情報が届いた。どうやら次の海軍長官が決まったそうだ』

『ほう、今の頭の固い連中にしては素早いな。それほど満州での敗北が効いたか、で次の海軍長官は誰だ？まさか平良の奴ではあるまいな』

『いや、そのために態々闘病生活を長引かせるよう工作しているの

だ。極端な愛国集団は政治の世界には不要だ』

『そのことで愛国獅子会の連中が五月蠅いだろうが、こちらで手を回しておく。』

『で一体誰なのだね次の海軍長官は？』

『それは高野君が知っていると思うが、どうなんだね。そろそろ白状したら』

『いえ、私は何も聞いておりませんが』

『？と為ると今日君が呼ばれたのは・・・』

『先の満州海戦での越権行為及び裏切り者の肅清に対する件です。その様子ですとどうやら私と皆様とでは情報が上手く噛み合わないようですな』

『隠していてもしょうがない。次の海軍長官は高野君きみだよ』

『そうですか・・・』

『驚かないんだな高野君いや高野海軍長官と呼んだほうがいいのかな？』

『茶化さないで下さい。それにまだ受けるとは決まったわけではありません』

『だが受けるのだろうか？四長官を維新会から出すのは結成当初からの悲願でもある。君ならば誰もが納得するだろう』

『いえ、私は上に立つに足る資格は．．．』

『上に立つものに必要なのは資格でも名誉でもましてや血筋でもない。資質と運だ』

『運ですか．．．』

『そうだ、これで君も晴れて我ら維新会の正式なメンバーとなったのだ。君には確かに運が付いている、自信を持ちたまえ』

『そう言う事ならば．．．分かりましたこの話受けましょう』

『やってくれるか高野君!!』

『ですが最終的な決定を下すのは帝です。あの方の言葉一つで私の身などいとも容易くどうにでも為ってしまうでしょう』

『そうならないように、我等が居るのだ。これからは維新会が君を利用するのではなく君が維新会を使うのだ。これまでの手腕を期待しているぞ』

『では海軍長官の件は一先ずこれでいいでしょう。次は国内経済と対アメリカ、エイリス、ソビエトに対する備えですが．．．』

こうして今日も維新会の夜は更けていく。

誰しもが明日の日本を信じそのために様々な策謀を巡らせながら、今宵の夜風は一体どこに飛んでいくのだろう。

日本帝国御所内

夜半遅く帝の自室で蠟燭のほのかな明かりが照らす中紙を捲る音が聞こえる。

帝は高野との謁見が済んだ後直に他の三長官を招集し御前会議を開いた。

議題は勿論次の海軍長官を誰にするか。

まず年功序列で言えば山本無限提督なのだが、持病故既に退役中の

身。

平良少将も若いながら能力は十分だか長引く闘病生活中で軍務には耐えられないと判断されはて困ったことになったと頭を悩ませていた時ふと高野の顔が帝の脳裏に浮かんだ。

帝は急ぎ高野のついて詳細な情報を集めさせ能力人望共に問題ないと判断され満場一致で次の海軍長官に高野を押す事が決まったのだが。

帝はどうしても釈然としない気持ちになっていた。

だからこうして夜一人で本当にこの判断でいいのか。

間違っていないのかと頭を悩ませていたのだが、経歴から様々なことと明石大佐を動かして背後関係を洗ってみても何も黒いところなど出てこなかった。

だからこそ帝は高野に対して疑念を抱かずにはいられない。

生まれてから人を疑わねば生きてこれなかった、人を信じられなかい生き方をしてきた彼女には、何ら後ろめたい事がない高野を本心から信用する事が出来ないのだ。

帝としてこの考えはいけないと思っても、どうしても心の中で渦巻く疑念は消え去る事が出来ない。

悶々として腕に顔を埋めた帝はそのまま悩みに悩み結果、何か問題があった時に備え後任を今の段階で選ぶということを決めるに留まっただけであった。

こうして疑念と疑惑が渦巻く中高野は翌朝御所に再び呼び出されることになるのだが・・・

果たして帝は高野を心のそこから信頼できる日が来るのだろうか？

果たして日本の運命はどうなってしまふのだろうか？

全ては高野にかかっていた。

登場人物紹介（前書き）

まんまプロットのコピペですが、色々と人なんか出てくるのでここに乘せておきます。

登場人物紹介

キャラクター及び各陣営紹介

日本陣営

御前会議メンバー

高野五十六

この作品の主人公。無為自然と常に余裕を持った態度で何事にも臨み大局的見地からの状況判断に優れた戦略軍政家。維新会メンバーの一人。

帝

日本帝国の最高指導者。幼い頃人を疑わずして生きていけなかった為人の嘘を見抜くのが上手い。またその超常の力は歴代トップであり神風の儀式の成功率は100%を越え既に二度に渡り大怪獣富嶽の撃退のみならず手傷を負わせるほど。高野に対して疑惑を抱いている。没案のアダルト帝

宇垣桜

日本帝国外務長官。ガチガチの愛国主義者だがそれは人一倍帝に対する敬愛と日本に対する忠誠心の高さの裏返し。だが時々融通が効かない事もあり維新会メンバーからは石頭と渾名されている。帝を諫めるご老公の役割も自ら買って出ている。

山下利古里

陸軍長官。帝国四長官の紅一点、祖父に偉大な陸軍元帥が居た為親の七光りならぬ祖父の七光りでは無いと証明するため努力してきた才女。しかい一方で精神論者である面が目立ち客観的見地や現実を見据える高野とはソリがあわない一面も。

猫平

内務長官。殆どの御前会議を何かとつけて欠席している。実は帝から維新会の調査を依頼されておりそのため特別に御前会議に出なくともよい許可を貰っている。帝曰く猫のように丸っこくて可愛い人らしい？

女官長ハル

帝の身の回りの世話をする奉仕女官達の長。帝を敬愛し御身を守ることを第一にしている。目下新しく海軍長官になった高野の素行を監視中。

柴神

日本の守り神であり、歴代の帝を選び自分は政治にはかかわることは無くこの国と帝を見守り続けている存在。しかし日本の危機の際には自ら刀を持って立ち上がりその姿は神話や書物の中で語られている。

帝国海軍

東郷毅

原作だと主人公で海軍司令長官。この世界だと巡洋艦戦隊の指揮官。イケメンで女好きで知られるが良く相方の秋山との関係でその筋では色々とネタを提供している人。

秋山敬一郎

東郷の参謀。原作でも参謀。恐らく彼は一生東郷の傍で扱き使われるだろう星の元に生まれたかわいそうな人かも？今作では一般的な意見を述べる銀英のムライ参謀と同ポジションになるかと思われる。

明石大佐

日本の諜報機関のトップ。自身もありとあらゆる忍術をマスターしたスーパースパイであり法螺貝一つで何処にでも推参し主の命令を何でも叶えてくれるニンジャ型ロボットではなく本当に唯の超人。現在高野を監視中。

維新会メンバー

その1

古くからの重鎮。凡そその正体を知るものは居ないが噂では伊藤閣下その人ではと噂されている。

その2

財閥の大物。一代で財を成した成金が三代目で遊び潰されたのを復活させ伸し上がった巨人。現在の閉鎖的な日本経済の実情を憂いている。

その3

飄々とした口調で物を言う運送業のトップに立つ男。彼の言葉は時に今の日本のあり方にすら鋭い指摘を入れる。

その4

犬である。維新会のマスコットで実は柴神の隠し子ならぬ隠し犬ではと専らのうわさである。

その5

退役した軍人会の取り纏め役。年寄りの冷や水、老婆心と自分でも思っているが最後まで国を良くしようと頑張るスーパーお爺ちゃん。

その6

東機関局長その人であり、主に大西洋宙域においての情報収集、諜報活動を行っている

その7

旭日艦隊の司令官。通常は哨戒艦隊の指揮官をしているが恐らく日本で高野の次に戦上手な軍人。

その8

紺碧艦隊の司令。維新会の紅一点ながら政治地理学的見地から独自の戦術戦略を編出す女傑。隠密艦隊である紺碧艦隊を手足のように

操る。

その9

某帝都大学の教授。世界でも有数の頭脳の持ち主であり私設武装組織である紺碧旭日両艦隊の装備兵器の開発も行っている。

その10

恐らく日本きつての大物政治家。古くから日本の陰陽共に活躍しこの国を支えてきた忠信家系の生まれである。維新会の存在を隠匿できたのも彼の協力あってこそ

その11

日本人ではなく元はガメリカ出身のメンバー。しかし日本に帰化し維新会メンバーとなる。主にハニートラップを中心とした諜報作戦で成果を上げている。

その12

現在は空席

その13

誰もその存在を知らない幻のメンバー。一説ではこの組織を作った創始者が座っているとも・・・。

ドクツ第三帝国

アメリカ共和国

アメリカ植民地

南米諸国

エギリス帝国

エギリス植民地

ソビエト連邦

中帝国

シュウ皇帝

幼少よりアメリカ、ソビエトの手の者によって甘やかされ暗愚として育てられた傀儡の皇帝。本作では言われるがままに日本との戦争を続けた。最後は不用と判断され毒殺される。

リンファ提督

中帝国海軍学校を主席で卒業したエリート。共有主義の思想にどっぷりと浸かり部下たちも全員共有主義者である。中帝国では比較的马トモな軍人ではあったが満州海戦で戦死。

ランファ提督

中帝国海軍提督に現場からの叩き上げでなった実力派だが普段はおっとりとしているらしい。アメリカに唆されて民主主義に傾倒して

いる．．．と言うよりも単に白人に憧れているだけである。ガメリカの真意を知る事無く満州海戦で戦死。

オフランス王国

イスパニア王国

その他

新海軍長官高野

一週間後高野は再び御所に呼び出され、帝から新しい帝国海軍長官に任命された。

数日中に華々しい式典と共に私は帝と共に居た。

帝の前に跪いた私は歴代長官が賜ってきた元帥刀と儀典官が仰々しく述べる勅を聞きながらこのような式典を古臭いと煩わしく思うのではなく、この式典の真の意味に気付いていた。

（帝様は政務用の服のまま。本来ならば儀式用の特別の設えもうけるのだが、恐らく戦時中ということもあり自重したのだろう）

（報道関係者が式典に招かれているのも気になる。この様子は日本全国に中継され繰り返し放送されるらしいがまるで自分が見世物のパンダか何かになったようだな）

そう頭の中で考えていた高野ではあったが不意に帝自らが自分の手を取り自然と立たせているのに気付いた。

そして手を取った時帝が耳元でそっと、

「バカバカしいとは思うかもしれませんが、ここは皆の顔を立ててください。それに折角の晴れの舞台なのですそのような顔つきでは今後のことを皆が不安がりますよ」

帝に言われて初めて自分の顔が懺然としていたことに気付き内心で笑ってしまう。

（無為自然を常としている自分がまさかこうまで感情を表すとは。外見から想像するよりも帝の能力は高く見たほうがいいな）

帝と新しい海軍長官が共に手を取って立つ姿は、瞬く間に日本国内のみならず銀河中を駆け巡る。

成程、してやられたは！！

高野は心の中で膝を叩いて感嘆した。

新しく任命された海軍長官の緊張を労うように見せて上手く私と自分の顔を売り込んだな。

今の帝は余り外に顔を見せないからこの機に纏めて見せようとしたのだ。

その為に今回の式典は正にピッタリであり、これでこの日本で私と帝の顔を知らぬものは居なくなった。

ますます唯の少女ではないな。

高野の内心の心が躍り上がるような感嘆を抑えつつも、そばに立つ帝が今どんな顔をしているのか、不思議と覗き込みたくなっていた。

華々しい式典から翌日。

全国に中継された放送で先の満州海戦敗北で気落ちしていた海軍は新しい長官を向かえ一氣に息を吹き返そうとしていた。

まず内部から裏切り者の存在を盾に旧主流派、年功序列で提督になった者達を軒並み更迭或いは閉職へと追いやり、これまでの艦隊決戦主義から航空機第一主義へと転換を図った。

同時に、内部調査で上がった国粹派、過激な愛国主義者や共有主義者などを放逐し軍内部の意思の統一を図ると共に維新会の息のかかった者達や実力があるのだが今まで冷遇されていたものを昇進させ極めて早く海軍の組織改革を成功させた。

こうして新生された帝国海軍を率い高野は因縁の地である満州に赴こうとしていた。

維新会会議

「では、海軍内部の組織改革はもう終わったと？随分と素早いな」

「元々改革の芽は何度か合ったのだが芽吹かなかったただけだ。高野君が余計な柵やなにやらを取り除いたからこそ此度の改革が成功し

ただ」

「いえ、私は特に何も。しかし意外と維新会のメンバーは広くいたのですね。巨大な組織だとは思っていましたがまさか末端の清掃員に至るまで構成員が居たとは・・・」

高野は軍改革の際自身で調べた或いは人事局に調べさせた情報と維新会からのデータを付き合せて組織改革の人員を練ったのだが、高野が目をつけたその殆どが維新会と何かしらの繋がりを持ち、逆に人事局が進めた人材は自身の調べと維新会からの情報で取るに足らない人物と判明し、改めて高野は自分が所属する組織の根の深さを実感した。

「今の近代的な軍創立から我々は実に様々なところで関わっている。今更こんなことでは驚いていられないぞ、高野君」

「それよりも軍内部の改革はいいとして満州開戦で失われた艦艇の補充をどうするかだが・・・いつそ旭日艦隊から何隻か出そうか？」

「いえそれには及びません。三割の損害とはいえ被害の奥は最初の奇襲と撤退戦時の例外的な損害だけで日本に帰還してから改めて修理不可能と判断されたのが二割で残りの一割は殆どが旧式艦ばかりです。それに前倉全長官は満州で動員した最新鋭艦隊はその四割しか動かして居らず日本国内に散った艦艇を召集すれば容易に補填できます」

「全く前倉さまさまだな。無論嫌味だが」

「なるほど遅くとも来週には再び攻勢に出る事が出来るか。高野君君は一体何処までを考えているかね」

「と言いますと?」

「中帝国を日本の領土にする気はあるかどうかと言う事だ。無論その気ならば我々は全力で支援しよう」

「.....」

「どうだね」

「私は、私は一軍人にしか過ぎません。帝の言葉が全てでありまたそれが日本の意思ならば従います。しかし・・・」

「しかし私個人としては日本は中帝国に深入りすべきではないと思います」

その言葉に満足した維新会メンバーは皆頷いて高野の言葉に賛成した。

あの星域に深入りすることの恐ろしさを、彼らは身をもって知っているのだ。

「しかし、日本がこれから生き延びる為には生活圏が必要です。最低でも満州宙域を取り日本は極東においてのバランスオブパワーを担うべきでしょう」

「それについてはいいさいない。だが、現在中帝国内部は皇帝の影で大きく二つに分かれている。新ガメラ派のリンファ提督、新ソビエト派のランファ提督。この二人は共に軍部を二分する勢力の筆頭だ」

「どちらにしても厄介ですな」

「それについては、私の紺碧艦隊に任せてもらいたい」

「？何か策があるのか」

「知っての通り、かの国は一枚岩ではありません。それを皇帝と四億年の歴史と言う実体のない虚構の存在で塗り固めているに過ぎません」

「成程な常に内戦の種を抱えているわけだ」

「ええ、後はそつと風をこちらから吹いてやればいいのです」

「だが火があまりにも強すぎると今度はこちらに火の粉がかかってくるぞ。そうなったらどうする？」

「それは全て列強が被ってくれますわ。租借地という最高の壁があるのです、各国は挙って軍を派遣し結果・・・」

「中帝国を舞台にパイの切り取り合戦、か。相変わらず悪辣だな、その方法だと我々には一切被害はでない」

「だが国内の連中がどう言うか分からんぞ。特に中帝国内戦を好機と見て深入りしそうな連中がでてくるやもしれん」

「軍部は私が抑えましょう。それに、その時はガメリカの存在を強調すれば思いとどまるはずです」

「成程な、高野君きみの考えが漸く分かったぞ。ガメリカを中帝国内戦に引きずりこませるつもりだろう」

「ならば彼等には頑張ってもらいませんと。だが中帝国の様に一つになるのは望ましくない」

「それは大丈夫だろう。ガメリカが出ってくればエイリス、オフランスが黙ってはいまい」

「ガメリカは恐らくリンファの連中を支援し、ソビエトも影ながらに共有主義陣営を支援するだろう。エイリス、オフランスは自分達の植民地を切り取るのに忙しかろうに」

「そして、中帝国は世界を支配する列強の睨み合いとなる。私の紺碧艦隊はその裏で内戦を助長させるよう動きましよう。無論恨みは全てエイリスガメリカオフランスに」

「我日本は満州に籠っていればよい。さすればガメリカも日本に目を向ける暇すらあるまい」

「その事なのですが、どうやらガメリカはどうやら若草会の連中、こっちたいようですぞ」

「何と！？まことか」

「東機関蒼海会を動かして掴んだがどうやら若草会の連中、こっちが尻尾を掴ませないから国ごと叩き潰そうということらしい」

「相変わらず粗雑で乱暴な連中だ。所詮は開拓民あがりのカウボーイ、ロデオガールだな」

「だが対ガメラ力開戦は絶対に避けなければ成らぬ関門のはず。それを今更・・・」

「それについては、皆様に聞いていただきたい事が・・・」

高野は自分が長らく暖めてきた対ガメラ力開戦の策を告げた。

「うゝん」

「これは流石に・・・」

「いやしかし・・・」

「高野君、本等に是しかないのか？もっと別の方法があるんじゃないのかね」

「私が今ある情報と力を鑑みての結果です。無論もっと別の方法は無いわけでもありませんが、これが最終的に一番犠牲が少なくてすむのです」

「まあ、皆さん落ち着いて。ですが現状では高野君の策が一番犠牲が少くないようですし、今後維新会はガメラ力開戦に備えていこうではありませんか」

「兎に角、皆さんにはより一層の協力をして頂ければ。私としては十分なのです」

果たして高野の策とは一体？

日本の運命やいかに！

維新会メンバーとの会議を終え、高野は再び帝国海軍司令部で精力的に働いていた。

その超人的な働きぶりにより再編と訓練を終えた海軍は予定よりも早く日本を出撃。

高野長官自身が直接指揮を取るため帝国艦隊旗艦長門に乗り込み満州へと再び侵攻していった。

同時刻、中帝国北京艦隊はプサンを出航。

再び因縁の地である満州において両軍共に戦いの火蓋が切って落とされようとしていた。

その同じ場所で・・・

「トホホホ、一体全体如何してこうなった？」

第一次満州開戦で裏切った桶口提督は現在中帝国警備艦隊司令とし

て手土産に持ってきた自分の船を没収されあまつさえ中帝国でも特に廢艦間近の老朽艦だけで構成された船団の司令官にされていた。

中帝国のハニートラップに引っかけたのはいいのだが、これでは話が違うと訴えるもこの国のシュウ皇帝に青龍刀を首に当てられながら。

「朕はとても情け深いぞ。態々ソチに我国の艦隊を与え更に提督にも取り立ててやった。これ以上は一体命以外何を望む？」

と言われては引き下がるほか無い。

「クソ、それもこれもあの高野のせいだ。アイツさえいなければ……」

「何をぶつくさ言ってアルね？ さっさと仕事するよろし」

「はっはい分かりました」

こうして桶口は高野を逆恨みしながら中帝国に扱使われる日々を過ごすのであった。

満州海戦

皇暦2598年

今年ここ満州において裏切りにより敗北した日本海軍は傷を癒し戦力を回復させ再びこの地に舞い戻っていた。

最新鋭戦艦長門を旗艦に戦艦八、巡洋艦十二隻、駆逐艦三十八更に今回は本土で擬装が済んだばかりの空母を四隻を加え戦力としては一回りほど前回は上回っている。

対する中帝国北京艦隊は流石に首都だけあるのか。

百隻以上もの大艦隊が北京を背にに布陣し日本軍と対峙していた。

中帝国艦隊は横陣を組右翼二十五隻、左翼三十五隻、中翼四十隻その他警備用の小型艦なども含めると合計で百二十隻を越えている。

更に偵察の結果右翼に先の海戦で裏切った末山元提督の旗艦が確認されていた。

日本海軍旗艦艦橋

「高野長官、偵察の結果敵の予想航路及び総数が判明致しました。敵は横陣を組こちらを待ち構えています」

ふむ、と高野は顎に手を当て暫く報告書を読んでいた。

同じ頃先の満州海戦で殿を勤めた東郷毅は新設された巡洋艦戦隊を

率い同じく偵察任務から戻った偵察機から報告を聞いていた。

「東郷長官、あと八時間ほどで敵と接触します。こちらの策はどんなものになるんでしょう？」

報告書を片手にコーヒーを二つ持ってきた参謀秋山は報告書を渡しつつコーヒーのカップを邪魔にならない所に置き自身は持ってきたコーヒーに舌鼓を打つ。

秋山敬一郎、士官学校以来東郷毅の右腕としてというよりも彼に扱き使われ特に女性関係の奔放さで最近頭の毛が薄くなっているのを気にしている二十五歳の童貞である。

「そうだな、敵の陣形から察するに真正面から数の差を生かしての包囲殲滅といった所か。こちらの策としては無難に数の少ない敵から叩き残りを掃討する。もしくは質と錬度の差を生かし中央の敵を撃破分断してからの各個撃破、それか横陣に対して縦陣でもってヒット・アンド・ウェイに徹するかだな」

東郷は渡された報告書をペラペラと捲りつつ秋山が淹れてきたコーヒーを口に含みその味に、お腕を上げたな、と一人心中で呟く。

そんな二人の様子を影からコソコソと腐の付く女性達がキャーキャーと小声で叫びながら薄い本のネタを補充していたのを何時もの光景と半ば日常と化してしまったこのカオスな空気に随分なれたものだ。と蚊帳の外である男性軍人たちは皆思った。

「だが高野てい……長官はそんな凡人の策を使ったりはしないだろうな」

東郷は自分達の新しい上官、高野五十六の事を思い浮かべそう言った。

「確かに。高野長官になってから海軍は変わりましたね。實際中帝国との長い戦争で皆情性的に戦っていたのが高野長官になってから一氣に変わりましたしね」

秋山はここ最近の忙しい人事と月月火水木金金の猛訓練を思い出し東郷が中々女の子とデートに行けないのをぼやいていて少しばかり心の中でいい葉ですと最近まで思っていたことを口には出さないことにした。

「ああだが妙に早すぎるんだよな。何にしても高野長官は色々と言がある人だからな」

東郷は高野に対して実際に合ったことは無いがどうも釈然としない気持ちになっていた。

女の子との寝枕物語の中で聞いたこの国を裏で操る謎の組織。

そのメンバーの一人が高野五十六その人であると。

確証は無いが火のないところに煙はでない、東郷は個人的に高野の事を要注意人物の上位に据えていた。

「東郷提督、高野長官から各艦戦術モニターB3を開けとのことです。どうやら戦う前から高野長官の腹は決まっていたようです」

秋山は届いた報告を直さま東郷に伝えると共に第二種警戒態勢を発令した。

「そうか。ならこの戦いは楽が出来そうだな」

と、普段の東郷なら此処でそんな軽口の一つや二つも叩くが戦術モニターに示された策を見て彼は啞然とした。

中帝国艦隊が待ち受ける満州宙域に対し日本艦隊は進路を変え中帝国艦隊を無視し中帝国首都北京に向かう。

是に驚いた中帝国艦隊リンファ提督は直に日本艦隊の追跡を開始するも船の性能の違いでどんどんその距離を引き離されていく。

中帝国リンファ艦隊艦橋

ソビエトから供給された旧式のミサイル艦に旗艦を置くリンファ提督は艦隊の足の遅さに苛立ちを覚えた。

「もっと早くならないのですか？これが全力だと？」

普段はおっとりポワポワとして赤本の朗読を趣味とし豊満な体をスリットの深い紅いチャイナドレスに包んだリンファ提督だったがこ

の日ばかりは焦りが先行して冷静さを失っていた。

「リンファ提督、これ以上は無理あるね。この船も他の船もみんなオンボロでこれ以上速度を出したら壊れてしまうね」

リンファ艦隊の参謀がこれ以上速度を上げるのは無理といいその答えにリンファ提督は臍を嚙んだ。

「・・・仕方がありません。ここはランファ艦隊に頼りましょう」

「!?!? ガメリカの狗をデスカ。しかしそれは共有主義の教義に反する・・・」

「今回ばかりは仕方ありません。幸い次の日本侵攻に備え北京には艦隊が集結しています。ランファ提督ならば或いは」

「分かりました。そうまで言うなら、ですがこの事は党本部に報告するアルね。覚悟しろヨロシ」

北京艦隊司令部

蒼いミニスカートのチャイナドレスに身を包んだ女性提督ランファ

はリンファ提督から連絡が来る前から既に日本艦隊迎撃の準備に追われていた。

北京に集結した延べ二百隻近くの艦隊を全て同時に動かすには皇帝の許可があるが自身の子飼いとガメリカ派の軍人を糾合すれば即席艦隊ながら九十隻程は集まる。

そう考えたランファ提督は北京艦隊司令部にて艦隊編成の臨時指揮を取っていた。

「今直ぐ動ける艦だけでいいわ、そう直に出撃させて。即席の臨時編成だから編成は集結してから行うわ」

次々に指示を出しながらランファ提督は着々と迎撃の準備を整えていた。

皇帝シュウに断り無く北京に集結した約半数もの艦隊を動かすのに骨が折れるが、逆にここで何らかの成果を上げる事が出来ればそう日本艦隊を撃滅すれば現在のソビエト、ガメリカの二分状態である中帝国軍部においてガメリカ派に大きく天秤が傾くことになる。

ランファ提督はそういった裏の打算的な事も含め艦隊の編成を急いでいた。

「ランファ提督リンファ提督から通信が入っています」

オペレーターからの報告をランファ提督は無言で取次ぎ不要とジェスチャーし自身も急ぎ子飼いの艦隊へと急ぐ。

どうせ内容は分かっているのだ。こっちの艦隊が日本海軍を押さえ

ている間に自分たちは後ろから襲い掛かって功績を一人占めするつもりなんだろう。

そうはさせて為るものかと、ランファ提督は駆け足で連絡船へと乗り込んだ。

日本海軍旗艦艦橋

高野はリンファ艦隊を振り切ったと見ると直に貴下の艦隊に次の指示を出した。

それに従い日本艦隊は開発したジャミング装置で目晦ましをしつつ再び針路を変更し所定の宙域へと向かう。

最初高野の作戦に参謀たちは挙って反対したがそれらを退け現に高野が言ったとおり中帝国艦隊は動いてくれている。

その様子はあたかも戦場全体を高野が上から駒を動かすようにボードゲームをしているような感覚さえ覚える。

名将のみが持つ丘の向こうに何があるのか。

それを可能性と想像でもって高野は更に高度な予見を見ていた。

このまま行けば中帝国両艦隊は合流し共に日本艦隊を搜索するだろう。

その時こそ高野の策が成就する時なのだ。

高野の思惑通り日本艦隊が来ないのを訝ったランファ艦隊は皇帝に黙って勝手に出撃した手前何かしらの成果を上げねばどうなるか分かったものではない為仕方なく日本艦隊搜索の為艦隊を出撃させる。

同じ頃日本艦隊を見失ったりランファ艦隊は北京に急ぎその途中でランファ艦隊と合流。

二人とも日本艦隊の姿が見えないことに薄ら寒い思いを抱き始めていた。

「兎に角日本の狙いが分からない以上艦隊を分けるのは危険です。此処は一緒に行動したほうがいいでしょう」

「ええそうねリンファ。私も同意見よ、それにしても薄気味悪い連中ね日本猿は」
リーベン

両艦隊あわせて二百隻近くの大艦隊が日本艦隊搜索に向け動き出す。リンファ、ランファ提督共に日本艦隊を見失った地点付近を搜索しつつ日本艦隊が何処に消えたのか小規模艦隊を偵察任務で四方に送り出していた。

二人が緊張の面持ちで偵察艦隊の動向に気を配っているその時。

「リンファ提督!!」

「ランファ提督!!」

二人の名前が同時に呼ばれレーダーに日本艦隊が現われた。

「やっと出てきましたか。直に迎撃を」

「ようやく現われたわね。恐らくでも数が少ないわどこかでこちらの隙を狙っているのね。全艦戦闘配置」

だが、日本艦隊は偵察に出した艦隊と接触すると直に後退を開始した。

「っ逃げるつもりですか。逃がしません」

「あ、こらリンファ抜け駆け禁止。直に追いかけて」

だが碌に訓練などしてこなかった烏合の衆が上手く機能するはずが無く逆に足の速い高速巡洋艦、駆逐艦で編成された日本艦隊から引き離されていく。

このままでは何れ見失う可能性があり焦ったものが勝手に砲撃を開始する始末。

だが大部分が射程外で当たるはずも無く、まぐれ当たりもそもそも錬度の低い中帝国海軍に求めるべくも無い。

そして遂に・・・

「あっ！！」

「ダメよ」

両艦隊は日本艦隊を取り逃がししかも広大な宇宙空間で追い駆けつことを演じた結果まんまと自分達の縄張りから引き離されてしまった。

そこに、後ろからリンファ、ランファ両艦隊を追跡していた高野率いる日本艦隊本隊が襲い掛かった。

「良くやった。敵は追跡で疲弊している。是を後方から打つのは容易い全艦紡錘陣形、敵陣後方より食らいつけ」

「先鋒は東郷提督に任せる。存分に暴れたまえ」

日本艦隊は常に偵察機で中帝国艦隊をコッソリと偵察しその航路を後ろから付けていた。

その為中帝国艦隊は日本艦隊に付けられているとは思わずまんまと高野の策に乗ってしまったのだ。

高野の策は簡単な戦力の誘引、拘束これの撃滅であり少々アレンジを加えただけだ。

現在北京にはまだ百隻ほどの艦隊が居るが、大規模艦隊を率いた経験のある提督は目の前のリンファ、ランファ提督しか居らず実質この二人が中帝国の主力と言っている。

戦略的に敵を誘き寄せ戦術的に優位に立って撃つ。

正に理想的な形で持って高野はリンファ、ランファ艦隊を攪乱しこの二人を討つ事で相対的に中帝国内部でのガメラカ、ソビエト双方の影響力を削ぎつつ後は紺碧艦隊が地方の反乱を煽りそれだけで中帝国は瓦解する。

態々南京、重慶まで攻め入る必要も無く中帝国側の安全を確保できるのだ。

その為に高野は唯一隻たりとも逃すまいと一気に勝負に出た。

紡錘陣形のまま中国艦隊二百隻近くを紙屑の様に吹き飛ばしていく日本艦隊。

混乱するリンファ、ランファ両艦隊は何かしようにも後背からの攻撃では後ろに向けて攻撃できない中帝国の旧式艦群ではいかんともしがたかった。

二人がどうするか方策を必死になって考えている間に焦った船から

次々に反転して迎撃しようとするが回頭中を狙われ次々に爆散宇宙のゴミの一部と化する。

「東郷提督これは・・・」

「ああそうだな。是は戦争なんかじゃない虐殺だ」

と先鋒を仰せつかった東郷毅の弁だが其れほどまでに一方的な戦いであった。

だが腐ってもアジアの勇中帝国海軍、血路が前にしかないと悟ると我先にと進みリンファ提督ランファ提督共に前進して逆に日本艦隊の後方を突こうと企図するも。

「残念だが船の性能が違いすぎたな」

高野長官は戦術モニターで中帝国艦隊のあまりに遅すぎた行動を見てそう呟いたという。

中帝国艦隊は船の足で日本海軍と平均宇宙八ノットも違いその差が血路を開こうとする中帝国よりも早く後ろから大蛇が口を開けるが如く中帝国艦隊は日本艦隊に飲み込まれる。

この戦いで中帝国の被害は撃沈艦百五十、大破十、中破小破含め二十、降伏艦六、逃亡して何とか北京に帰還したのは僅か四隻にも満たなかった。

リンファ提督ランファ提督は共に戦死し実質中帝国海軍主力は永久に失われ是により中帝国は急速にその命脈を失っていく。

北京に集結していた残り百隻近くの艦隊はそれぞれいい訳をしつつ同郷の者を集い各地方に散って軍閥化し今まで押さえつけられていた少数民族が辺境で反乱を起こす。

この影に維新会隠密潜水艦隊紺碧艦隊が暗躍し各地で反乱を煽りつつ地方の軍閥化で急速に失われた租借地の安全を確保する為に白人達に日本陸軍の旧式武器を卸し中帝国内部において中帝国人と白人との対立を深めさせていく。

たった一会戦で中帝国の命脈を実質的に断った高野艦隊は北京を占領せず満州宙域の制圧と確保のみに留め日本へと帰還した。

第二次満州海戦と名づけられたこの戦いは戦史上まれに見るパーフェクトゲームであり各国報道機関を通して伝えられた日本の勝利とその立役者である高野五十六の名は世界中に知らぬものは無いほど轟く。

そしてその名前は超大国を裏から操る彼女等にも既に聞き及んでいた。

「中帝国の敗北、日本の一方的な勝利。此処までいい」

「ええ、でも折角中帝国内部の工作が是で無駄になってしまった。この落とし前どうつけようか」

「其れと日本が中帝国に深入りしないにも想定外です。あのまま満州に居座られれば残った土地は直に列強に奪いつくされるでしょう」

「新しい旗が必要ね。愚民どもに分かりやすい明確な正義の旗が。中帝国内部ではなく在野に人を探すことからが先決ね。直にリスト

アップを始めましょう」

「其れと今回の敗戦で恐らくもう中帝国は長くない。小細工する時間はないのでは？」

「なんとか其れは持つてもらうしかないわ。最悪滅ぶと分かっているものなのだから最後まで貰う物は貰っておきましょう」

「分かった。こっちでも工作を行っておく、期待しているわハンナ」

「軍部の連中は任せて。其れと中帝国に輸出する武器の方も」

「ええそれじゃあ。全ては私達の最大限の勝利と繁栄の為に」

満州海戦（後書き）

人物紹介に東郷毅、秋山敬一郎、中帝国を加えました。

誤字修正 休息↓急速

日本の方向性

中帝国を一度の海戦で破った高野は週末には日本へと帰還し民衆から歓呼の声をもって出迎えられていた。

本人はいたって無然とした態度を崩そうとはしなかったが、久しぶりの大勝に国も国民もみな舞い上がっていたのは事実だ。

そうした中高野は報告の為に帝が居る御前へと車に乗って向かっていった。

「ご機嫌麗しく。帝さま高野五十六め只今帰還いたしました」

高野は帝の前で正座し頭を垂れた。

「表を上げなさい高野。頭を下げるのは私のほうです、良くぞ見事大勝して来ました」

「全くです。しかし、あの間々いけば北京を占領することも出来たわけではありませんか」

帝、宇垣共に高野を讃えるが宇垣の方は何故中帝国に止めを刺さなかったのかと高野に聞いた。

それに続いて陸軍長官である山下が囁み付く。

「そもそも敵の主力を撃破して置きながら首都を攻めないなど。いざ首都攻略と意気込んでいた我陸軍の面目丸つぶれでは無いか」

高野は二人の言葉を黙って腕を組んで聞いていた。

確かに二人の言い分も分かる。

実際主力を撃破された中帝国は最早抗うことなどできるはずがなく、容易に日本の前に膝を屈服するはずであった。

其れなのに何を躊躇うのか？

だからこそ高野はそんな考えの二人に対しどう答えるか考えていた。

今戦えば確かに勝てる。

だが、強大な権力と力で押さえつけられていた中帝が滅びその我等が侵攻すれば反発は必死。

地方の軍閥化のみならず民衆がゲリラとなって泥沼に陥る羽目になる。

そうなる前にここで一旦手打ちにするのが最善だと何故分からん！？

高野は暫く黙しゆっくりと口を開いた。

「確かにお二人の言も一理ある。しかし、この戦争の本来の目的を見失ってもらっては困る。宇垣殿はご存知だろうが現在の満州の地はもともとは一つの独立した国家であり我国とも関係が深かった。其れを中帝国が併合したのがそもその発端であった」

「長きに渡る戦争で大義名分こそ違うが、日本の本来は満州国の復

権であり中帝国が容易に日本に手出しできない事こそが重要。ましてや中帝国を併合するなど言語道断、兎戯にも劣る行為です」

高野の強い弁に二人は思わず口をつぐんだ。

「お二人の様に確かに中帝国の領土は魅力的です。しかし、忘れたとは言わせませんよ、かの国には列強の租借地があり我国が中帝国を併合すればどう思うか。唯でさえ近年ガメリカの圧力が増えいく一方で西に兵力を割かれる事は何としても避けねばならないと私は考えた次第です」

高野は二人に反論を許さぬよう畳み掛けるよう論を重ね、キツパリと言い切ったことで二の句を告げさせないようにした。

パンパン

帝が手を叩きそこで漸く二人は自分たちが帝に背を向けていることに気付き帝に振り返る。

「そこまでです。貴方達の考えはよく分かりましたし此処でこの国の帝として勅を降します」

一拍間を空けた帝は威厳を少し込めて勅命を下す。

「最早日本にこれ以上の戦いは不要です。よって宇垣長官中帝国と講和の準備をしてください。山下長官は占領した満州の治安を海軍と連携してお願いします。内務長官の猫平には私から諸手続きをするよう伝えます。それと高野長官」

帝はすっと目を細め高野の目を見つめる。

「貴方の慧眼は流石です、しかしこの国の方針はあくまでも帝である私が決定します。今後現場での独断専行は慎むよう肝に銘じてください」

「・・・謹んで、肝に銘じさせていただきます」

高野はそういつて立ち上がり御前を後にする。

他の長官たちもそれぞれ与えられた役割を遂行する為帝に一礼してから御前を後にした。

「・・・・・・・・ハルさん。明石大佐を」

帝の傍に控えていた女官長ハルは直に重箱に入った法螺貝を帝の前に差し出した。

シュタツ

音も影も無く帝が法螺貝を吹く前に忍者スーツに身を包んだこの国のスーパースパイ明石大佐が現われる。

「用件は分かっていますね。直に高野長官の後を追ってください。彼の行動を逐一漏らさず報告してください」

「・・・・・・・・・・」

「それともし彼が自らの利益の為に動くのであれば、海軍長官に相応しくないとして相当の”処置”もお願いします」

「御意」

出たときと同様明石大佐は音も影も無く帝の前から姿を消した。

「高野長官、貴方の本質を見極めさせていただきます」

帝はそういつて御供の女官達を引き連れ御前を後にした。

残された法螺貝だけがポツンとその存在を主張するように卓の前に置かれたままになっていた。

日本の方向性（後書き）

そろそろ日本を離れてエイリス、ドクツ、ガメリカの話を書きたいかなと考えています。

さてはてどうするか・・・。

次回もまた宜しくお願いいたします。

鋼鉄の軍靴（前書き）

少し早いですが、ドクツを出します。

あんまり二次で大帝国を見かけないので少しでも誰かが書いてくれればと思いつつ、気ままに独善と偏見でこれからも書いていこうかと思えます。

因みに、作中で出るキャラは全てオリキャラと原作キャラの半分半分の性格と考えていただければ結構です。

鋼鉄の軍靴

統一宇宙暦939年

ドクツ第三帝国總統官邸

「お疲れ様レーティア。素晴らしい演説だったわ」

ドクツ第三帝国宣伝省グレシア・ゲッペルスは先程の演説を思い出し、彼女の小さなアイドルの勇姿を恍惚の面持で身震いした。

両頬に手を当てる所謂恍惚のヤンデレポーズを取っていた。

「照れるよゲッペルス。あの演説の原稿も全部お前が考えたじゃないか」

この国の總統は演説の内容を思い出して少しこそばゆい思いを抱いていた。

「そんなことは無いわ。貴方レーティア・アドルフだからこそこの国もそして国民もついていくのよ」

彼女ドクツ總統であるレーティア・アドルフは、宇宙一の天才的頭脳と彼女の愛らしさにほれ込んだゲッペルスによってプロデュースされ、選挙によってこの国の總統に選ばれた。

最初、イタリンで始まったファンシズム。

一種の政治に対する市民の無関心さ、無気力さの現われであるこれ

らは国政を容姿によって選ぶ。

つまり芸能人やアイドルが国のトップになるとんでもない主義であった。

だが、その唯のアイドルが政治的才能があつたらどうだろう？

或いは、トップが無能でもそれを裏で操る人物が怪物であつたのなら……。

幸いにしてレーティアは前者の究極系。

万能の天才であり、先の世界大戦で敗北しおりからの世界恐慌で壊滅的なまでの打撃を受けたドクツ経済を立て直し、積極的な外交策で嘗ての領土を取り戻していった。

また天才的プロデューサーであるゲッペルスの手腕によりドクツ政治史上最も高い支持率100%を誇る現内閣は、正に国民の希望の星であつた。

「それよりもレーティア。今朝ニュースで見たけど日本が中帝国に完勝したそうね」

「ああ、そうだな。まあ本来ならば別段驚く事じゃないんだ」

「あら、意外と日本を買っているのね」

「客観的に見ても日本が中帝国に負けることは万が一にもありえなかった。そもそもっと早く日本が本気になっていれば中帝国など鎧袖一触。前任者が唯無能だったただけだ」

「じゃあ、今の日本には出来る人が居るのね。例の高野．．．イソロクだったかしら？まあ経歴を見れば中々に光るものがある人だけど」

「それだけじゃない。日本にはもっと別の．．．．．そう、私たちが知らない大きな力があるのかもしれない」

「成程、単なるまぐれじゃなくそうなる下地があつたから。是なら、レーティア。例の案件進めてもいいんじゃないかしら」

「そうしてくれゲッペルス。少し疲れたな、私は少し休む」

「あら、それなら紅茶を淹れましょう。気が安らぐわレーティア」

「ありがとう、ゲッペルス」

同時刻 ドクツ第三帝国統合参謀本部

ドクツ第三帝国元帥「鋼鉄の灰色熊」の渾名で知られるアイゼン・マンシュタインは難しい顔を浮かべていた。

「ううむ・・・」

腕を組み目の前のボードを見つめる目は厳しく、彼の状況が悪いことを物語っていた。

対する相手は、ニヤニヤと不敵な笑みを浮かべながら傲岸不遜な面持で軍服を着崩した男。

エル・ロンメルはもうかれこれ十分程悩んでいるマンシュタインを面白ろそうに見ていた。

「マンシュタイン閣下。そろそろいいですか？私が打っても」

「いや待て、もう少しだけ。あと四分二十六秒は残っている」

「その前はこの前は三分でしたね。いい加減敗北を認めたらどうです？」

「いやまだだ、ドクツ軍人は諦めない！！」

「はあ、ではご勝手に。何か手が浮かんだったら言ってください」

そういつてロンメルは愛用のカメラを取り出し分解して整備を始めた。

凡そ軍人らしからぬロンメル態度だが、これでもイタリン王国前総統ピエトロが起こしたエチオピアとの戦争で、義勇軍として参加し多大な功績を挙げそれがレーティアの目に留まり元帥に拔擢された非常に優秀な軍人である。

マンシュタインとは対照的な性格をしているが異なるタイプの軍人が二人並ぶという奇妙な光景は、この時代のドクツ第三帝国がどのような国づくりをしているのかを象徴していると言えよう。

「そういえば、今朝新聞を読んだのですが日本が中帝国と戦って勝ったようで」

「ああ、私も既に知っている。詳細な情報が入るまでなんとも言えないが殆ど日本側は損害が無かったらしい」

「どう思います？」

「どう思うとは？」

「日本はどうやって中帝国に勝ったのか。気になりませんか」

「確かに、質では日本が上回っているとはいえほんの半年ほど前に主力が壊滅した筈。それを極短期間で建て直し敵に重たい一撃を入れるとは非常に優秀な指揮官が率いたのだろうな」

「私もそう思うのですが、マンシュタイン。私はどうもその人物が気になるんですよ」

「成程な、優秀な将は敵味方を惹きつけてやまない、か」

「貴方もその一人ですよ。マンシュタイン元帥」

ロンメルは意味ありげな笑みを浮かべ、マンシュタインがそれを大きな咳を上げて誤魔化している間に勝手に駒を動かした。

「あ、貴様。卑怯だぞ」

「チェックメイト。では私は軍務があるのでこれで失礼します」

マンシュタインが立ち去るロンメルの背中に非難がましい視線を注ぐなかロンメルは飄々と風のように去っていった。

鋼鉄の軍靴（後書き）

作者です。

これからはエイリス、ソビエト、ガメリカと各国の紹介回が続きますが前作の大帝国の世界にもしあの提督がいたら・・・のキャラを出すかもしれません。

その場合ですと、行き成り話が飛んだり訳若布になるかもしれませんのでご注意ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4834y/>

俺が、俺たちが海軍長官だ！

2011年11月27日15時54分発行